

(05.03.06)

第5回阪大フォーラム準備ベトナム視察の報告

－ 第1部：阪大フォーラム打ち合わせ －

阪大レーザー研 高部英明

(takabe@ile.osaka-u.ac.jp)

(本報告書は9月開催の表題の第5回阪大フォーラムの視察に05.2.20-24にかけて出かけた際の記録である。ベトナム国立大学ホーチミン校とハノイ校を公式訪問した際とフォーラムの会場を見学した際の記録である。また、総務責任者としてハノイ側と話し合った際の財政的な課題について個人的な感想や提案など書かせて頂いた。05.03.06)

1. ベトナム国立大学ホーチミン校

2/21 午前中、ベトナム国立大学ホーチミン校を訪ねた。会議室に案内され、20名ほどのベトナム側関係者と意見交換をした。大貫先生から日本側の参加者の紹介があった。まず、大貫先生のベトナム訪問が4回目であること、ホーチミン市は3回目であること



図1：ホーチミン校に到着した阪大の調査団一行。キャンパスは学生であふれていた。青い空、30度をこえる気温。でも涼しい。

など。また、岸本氏が9月より研究科長になることなど紹介した。

ベトナム側からは物理学科 (Faculty of physics) の活動を含め自己紹介があった。Department of Theoretical Physics を初め8部門あること。部門長の数名は講義で不在のため、替わりのものが部門の説明をすると。まず、理論物理部門から紹介した。

理論物理部門：7人のメンバー、それぞれ、Particle Physics, Solid State Physics, Phase Transition, Low Dimensional Staff, Particle Physics Applied to Computational Physics Algorithm.

計算物理部門：若い研究者が部門長。彼は、修士号はフランスで取得し、ドイツのマインツの Institute of Physics で博士号を取得し、その後、1年間の PDF を含め、ドイツには5年間いた。ドイツではファインマン・ダイアグラムを自動計算するためのソフト開発を LINUX の環境で行っていた。計算物理だが専門は素粒子理論で計算のアルゴリズムなどの開発がメイン。優秀な学生が日本と韓国で現在研究をしていると紹介していた。

固体物理部門：Thermo-luminosity の研究をしていると言う方。

地球物理部門：若い活力のありそうな方であった。専門は海洋科学や気象学。現在は海洋内の波動現象や大気の波動と海洋海面の相互作用など研究している。私は地球シミュレータセンター(<http://www.es.jamstec.go.jp>)の計画推進委員であり、この世界で一番速いスパコン(制作費400億円)の2/3のユーザーが気象・大気・海洋関係のシミュレーションである。昨年、10月にはこの大口ユーザーのヒアリングをしたので、研究内容はだいたい分かる。彼の研究テーマを聞き出そうとしたら、恐縮してしまったようで「まだまだです」の様な返事。小規模な数値計算を行っている。現在、ドイツ、日本と共同研究をしているとのこと。

応用物理部門：若い方が部門長であった。構成は20人で2人の教授以外は皆若い。一人は仏に、2人は韓国にいる。薄膜の研究などをしている。私の専門はプラズマ物理なので「プラズマプロセス」のような工業応用の研究をしていないのかと聞いたが、していないとのこと。



図2：ベトナム国立大学ホーチミン校の会議室にて。大貫先生が阪大を代表して挨拶している。左側が阪大、右側がホーチミン校教官。

宇宙物理に関しては、大学ではないが30kmほど離れたところに天文台があり、その女性研究者が電離層などの研究をしている。観測装置を東大やカナダとの共同研究で手に入

れ、観測している。「電離層ならプラズマ物理を研究しているだろう。その方のメール住所を教えてください」という。ベトナムでのプラズマ物理の研究者のキーパーソンをAAPPS（アジア太平洋物理学会連合：<http://www.aapps.org/>）のDivision of Plasma Physics設立のために探している。まずは、紹介してもらい、話した上でベトナムのプラズマ物理のキーパーソンを捜そう。彼女は那条口にはなりそうだ。

私がさらに色々聞き出そうと質問していると、大貫先生に止められた。時間が余り無いので、このあとの見学に移りたいと。学生実験の所にはエアコンもなく大きな扇風機があった。研究室はきれいでエアコン完備。日本製という真空容器やスペクトロメーターなど見学した。

キャンパスの中は学生であふれている。30度を超える良い天気、日本の夏のように暑い。太陽の紫外線も強く感じる。女学生3人を捕まえ英語で話しかけた。学部生のように物理を勉強しているという。たどたどしいが、しっかり英語を喋る。「将来研究者になりたいの」と聞くと、はにかんで笑っていた。

バスが出る。昼食を招待して頂いた。そのレストランの庭には写真のような大きなフルーツがなっていた。昼食後ホテルに戻りチェックアウト。空港に向かいハノイへの2時間の旅となった。この日は



ホテル・ホリズンに着いて自由行動。詳しくは第2部を読んで下さい。

写真3：昼食を招待して頂いたホーチミンのレストランの庭にはこんな大きなフルーツが実を着けていた。

2. ベトナム国立大学ハノイ校（全体会議）

朝、8時30分にロビーに集合。本部からの4名と一緒に、ハノイ校に向かう。ハノイ校では立派な会議室に案内された。建物自体もきれいな所だ。すでに、ハノイ側の方々は窓際に20人ほどが座っている。私たちも着席する。大貫先生がまず初めに挨拶する。その内容から重点のみ箇条書きにすると以下の通り。

1. 3月15日が招待講演の講演者決定の締め切り。

2. 予算と支払いについて (Budget and Payment)

- ・ ホーチミン市の人たちのサポートは基本的にはしない。
- ・ 招待講演者は阪大の 21 世紀 COE でサポートする。
- ・ 会議場とバンケットの会場の費用はサポートする。ただ、会議中に食べ物などは出さない。
- ・ ポスターはこちらで作成する。
- ・ Proceedings もこちらで作成する。
- ・ 登録費は無料。
- ・ 高部発言：AAPPS 後援を認めて頂いたので、公の機関に会議援助を申請できる。ICTP(International Center for Theoretical Physics), UNESCO, APCTP(Asia Pacific Center for Theoretical Physics)などに至急申請してほしい。

3. 参加者予定数

- ・ 日本からは阪大だけで 130 (Minimum)~150(Maximum)参加予定。現在、招待講演者として中国 2 人、韓国 1 人、インド 1 人が決まっている。5~7 人は外国から招待講演者が来る。
- ・ ハノイ以外のベトナムから何名程度参加予定か？ (返事なし)。
- ・ 高部発言：第 9 回の APPC を昨年 10 月、ハノイで開催した。参加者総数が 367 人であった。その内訳は外国から約 170 人 (内、日本から 72 人)、ベトナム国内から約 200 人であった。従って、物理関係者だけでも最低 200 人はいる。これに、数学が加わることになる。(ただし、APPC への中国参加者がほとんどいなかった。中国とベトナムは複雑な関係にあり。本報告書、第 2 部の 5 ページ下を参照)。

引き続き、ベトナム側の国際交流のクイ女史とルオン議長の発言。

1. 経費や人の移動など (クイ女史)

- ・ VISA が必要な場合はベトナム側にも経費が発生する。(高部：日本からの参加者はビザが不要であることを確認。昨年 7 月からビザは不要になった。APPC の際、混乱があったが大使館で確認した)。
- ・ ベトナムの習慣で会議を主催する際は主催者が昼食を出すことになっている。これは、参加者が会議をさぼることを防ぐ意味あいもある。
- ・ 移動についてはバスを用意する。料金については総務で話し合う。
- ・ ホテルから会場まではタクシーで 5~10 分程度。
- ・ 今回、宿泊しているホテル・ホリズンの場合 9 月はシーズン中で 70 ドル強の料金になる。(高部：これについては、検討課題。もっと安くなるはず)。



図4：ハノイ校に着いた。奥の建物で会議を行った。

2. ポスターについて（ルオン議長）

- ・ ポスターに古い地図を使っているが、15世紀頃はオランダが支配していたりした。ホームページではハノイ近辺に書かれている字が読めない。拡大したのを見たい。
- ・ 15世紀はベトナムと中国の関係が良くなかった。ハノイが中国の領土になっていたら問題だ。詳細が見たい。
- ・ Web-site の中身そのものは基本的にOKだ。

そんな話しをしている時に、ハノイの数学者が A, B, C のセッションで数学が C になっていることへの説明を求める。さらに、ハノイでやるのだから Hanoi-Osaka 云々とハノイを会議名の最初に置くべきだと主張。これに対しては明快な返答をしないままに、個別会議へと移った。

3. ベトナム国立大学ハノイ校（総務担当会議）

全体会議の後、A, B, C のそれぞれの班および総務での現地実行委員との話し合いを別々の部屋に別れて行った。総務の打ち合わせの様子を報告する。総務責任者は当初は研究者であったが、当日には VU NGOC TU 助教授（Vice-Director, International Relation Department; Vice-Director, Asia Research Center）に代わったと本人から挨拶があった。議論の要点だけを簡条書きにしよう。

- ・ 基本はベトナムの参加者についてはベトナム側が費用負担をする。
- ・ VISA 取得には本人が母国のベトナム大使館に支払う以外に、ベトナムの受け入れ

者が1件につき10ドル支払う必要がある。これについては、招待講演者については21世紀COEが支払う。参加者が増えた時はどうするか課題として残る。

- ・ 会議の始まりと終わりの飛行機の便にあわせて、バスをクイ女史が手配する。バス代については、利用者から個別に徴収して支払う。
- ・ 昼食は日本人参加者には個別に近所のレストランなどで食事を取ることができるように自由にしてほしいと私が依頼。
- ・ ホテルからの移動のバスは手配の必要はない。歩くなり、タクシーを利用するなりしてもらおう。情報を参加者にきっちり伝えることが大切。
- ・ ホーチミン市など遠隔地からの参加者は十分見込めるかの議論。ハノイ側総務は「ホーチミン-ハノイの航空運賃は200ドルで、教授の月給に相当する。彼らに参加を無理強いは出来ない。また、それをサポートできるとは思えない」という。協議の結果、は公開できない（失礼）。鉄道は極めて安い、片道40時間の旅だそうである。
- ・ この国では大学と研究所の省庁が違うようで、関係について聞いた。総務のTuさんの答えは「関係は良好である」とのこと。研究所からの積極的参加も呼びかけてもらうようお願いした。
- ・ また、Asia-Pacificと銘打った会議であることから近隣諸国からの参加やその呼びかけについて話し合った。Tu総務の答えでは「ASIAN University Networkがあり、これを通して参加を呼びかけることが出来る」とのこと。
- ・ 総務打ち合わせでは本部の小川さんが総長の宿泊に関する質問をクイ女史に詳細について質問していた。内容は省略する。



4. 会議場の見学

昼食後、市の中心北に位置する会議場の見学と会議場の責任者との打ち合わせを行った。会議

場の副支配人が対応してくれたが、ICC(International Convention Center)という名前にしては副支配人、英語がしゃべれない。通訳を通して細々とした打ち合わせを行う。途中で私たちは映写のスクリーンが気になったので、会場の前面にスクリーンがあるか確認す

図5：フォーラム会議場(ICC)での会議場副支配人達(右側)との打ち合わせ。ルオン議長が阪大側の質問を通訳してくれている。スクリーンは奥手のサイズのものしかないという。当日までに大きなスクリーンを製作することになった。



図6：会議場のVIP Room。本部の小川さんと（常深氏撮影）

ンタルもない。持参するか、現地、Panasonic と交渉して借りるなどを皆で話し合った。

初日9月27日のプレナリー（全体会議）のみ、立派なホールを使う。2日目からは

3つのセッションを平行に進める。各セッションの会場候補を見て回る。十分な広さの会場はありそうだ。ここ以外にも正面庭を挟んで別棟もあり、そこにも適する広さの会場があった。逆にチョイスが広がりすぎて、ではないがなかなか最終決定がくだらない。選択は大貫先生や各セッションの議長にお任せした。だから、私は、最終的にどうなったか詳しくは知らない。

本部の方々は初日が本部主催であるためメイン会場を詳しく見学。その際の総長控え室など見て回った。ホールの横に立派なVIPルームがあ

る。彼らが用意していたスクリーンは横が4mほどの小さいもので、会場の立派さからはかけ離れた小さいスクリーンだ。今回、大広間で使うための液晶プロジェクターも用意してきたが、試写はかなわなかった。会場から考えて、大きなスクリーンは用意させる

（これで合意）として、4千ルーメンス程度の明るさのプロジェクターが必要だろう。ここにはレ



図7：昨年10月ハノイでの第9回APPCの開会式。挨拶をしている議長でベトナム物理学会会長のグエン・ナム・ヒューさん。会場はホーチミン博物館。大きなスクリーンが正面にあるのに、液晶プロジェクターは横の小さなものだった。まだ、国際会議主催になれていない。



図8：バンケット会場になるホテル・ホリズンの宴会場での打ち合わせ。中央が国際交流担当のクイ女史。

る（写真6参照）。総長に見てもらおうための写真を撮っている。立派な応接室である。

5時頃、会場の見学を終えてホテルに戻り、バンケットの会場を見た（写真8参照）。ここは写真のように3室ぶち抜きで昨年10月のAPPCのバンケット会場に使ったところだ（写真9参照）。前回の経験から十分満足のいくバンケットは可能である。問題は料金のみ。これについて、現在は相手の言い値であり、詳細の説明を受けながら交渉の余地があることで意見が一致した。



写真9：ホテル・ホリズンの会場を使った昨年10月のAPPCのバンケットの様子。テーブル形式で料理は写真左手にある。ステージでは伝統楽器の演奏などのアトラクションが繰り広げられた。大変大きな会場で、300人は収容できたと思う。写真左、一番手前がAAPPSの新会長に決まったツンさん（台湾）、その横左が副会長に決まった多田先生（元応物学会会長）。

5. まとめと提案

第5回の阪大フォーラムを開発途上国であるベトナムの首都ハノイで開催するについては総長は前向きではなかったと聞いている。第4回まで米国または欧州で開催しており、そのことも理由であろう。阪大フォーラムの趣旨を私が理解する限りでは必ずしも米欧でやることを義務づけてはいないようだ。大貫先生はベトナムとの学术交流に数年、心血を注がれており、本件が持ち上がった際、ベトナムに心を決めていたようだ。阪大の経営委員会で最終決定がなされる前に、ベトナムにどの程度の物理学者や学生がいるのか不安を漏らす総長に説明するため、APPCの暫定的なプログラムをPDF-fileで大貫先生にお送りした。そこには200人からのベトナム側の論文発表が掲載されていた。今回のベトナム開催の判断材料の一つとして役立ったのなら幸いである。

こんな事もあり、かつ、AAPPS (The Association of Asia Pacific Physical Societies) の次期理事候補（理事の任期は05年1月～07年12月）として日本物理学会（会員約2万人）より推薦されていたこともあり、大貫先生から総務責任者を仰せつかった。私も物理学会の理事に就任（02年9月、現在2期目）して以来、AAPPSの活性化に努力してきた。

私の目指すことと、大貫先生の開催趣旨が一致することから喜んで総務を引き受けた。

個人的には、阪大フォーラムとして欧米で開催しても、近年特に物理系の国際会議が欧米で星の数ほど開催されている現状を考えると、欧米開催はそんな星の中に埋没して投資効果に見合わないと考えている。その点、昨年の APPC がベトナムで物理全体の国際会議として初めての会議であった (Vietnam Times という英字紙に書いていた) ことから、今回のフォーラムは将来的に極めて重要な意味をもたらすと自負している。

湯川秀樹が戦後の交通の不便な中、有名な物理学者が理研に招待された際、東海道を何時間も掛けその学者の講演を聴いたり議論をしたりしたことが印象深く彼の随筆に書いている。また、朝永も京大に何時間もかけ外国からの最新の情報を手に入れた思い出など書いている。未来の湯川や朝永が今回のフォーラムのため 40 時間かけてホーチミンから駆けつける可能性はあるわけで、ベトナムの学生にとっては刺激の多い会合になるであろう。そのためにも多くのベトナム人が会議に参加できるように出来る努力はしたい。

先に書いたが、ベトナム側の資金不足は深刻である。戦後、日本が貧しい中で米国の国際会議に物理学会が沢山の学者を送り込むために資金集めに奔走したことの遺物が未だに物理学会の会計にある。日本の事情を聞き知った米軍が研究者の旅費に充ててくれ、と当時としては破格の資金をくれた。しかし、当時の理事会は米軍の援助は受けないと返還したが、米軍が受け取らない。今だのその金額は預金通帳に凍結したまま、毎年、会計の審議の際、どうするか議論になる。

言いたいことは、ベトナム側が資金を自前で用意する努力をするのは当然としても、ある段階で資金繰りが極めて難しく、ベトナムからの参加者がハノイなどの近郊だけになるようであれば、1000 km 離れたホーチミンからの参加者などの旅費の援助などに乗り出すべきだと考えている。我々の諸先輩が米国の援助で戦後の財政的に苦しい状態でも世界の最先端の物理に触れることで優秀な後輩達を育てていったように、今度はその恩返しをベトナムなどの開発途上国にするべきだと個人的には考えている。21 世紀 COE の経費支途として可能な限り援助すべきと考える。

それが無理なら、他の機関による支援を考えるべきだ。実は、先日、文科省系の方と今回のことを話していたら「最近、JICA (独立行政法人・国際協力機構 ; <http://www.jica.go.jp/>) が ODA として科学などの学術分野の支援も事業に組み込もうとしている。阪大が出さない (だせない) なら、相談してみてもどうか」と言われた。「現在、中国の ODA は近い将来無くなることから、日本の企業は ODA が潤沢に行きそうなベトナムに興味を持っている」とも。また、現地で同行の研究者達と「これだけ、日本企業が進出し

ているのだから、趣旨を説明して賛助金を募り、ベトナムの遠隔地からの学生の参加などを可能にする事ができるのではないか」などと話し合った。ここは、大貫議長の判断次第であり、まずは阪大で出来ること、出来ないことを整理して、出来ないところはJICAや現地日本企業の援助を受けても良いと私は考えている。大貫先生のOKができれば、行動に移る心づもりはできている。

大切なことは、私たちが国民の税金を使う訳なので、今回のフォーラムが日本とベトナムの良好な関係構築に役立つことである。これは、ベトナムの将来に対する投資であり、投資する以上はより多くのベトナムの学者や学生に阪大の学術の高さや幅の広さ、魅力を知ってもらうことである。対等の関係でのフォーラム開催とは名目は言えても、開発途上国にそれを強いるのは、マイナスが大きいでフォーラムの趣旨は生きないと考える。現在、AAPPSを世界の第3局の物理学会連合にするべく理事として動いている。そのために学振にアジア学術拠点プログラムの申請の検討をしている。昨週、3/1、北京のNSFC (National Natural Science Foundation of China; <http://www.nsf.gov.cn/>) を中国国家天文台副台長のGang Zhaoと一緒に訪問した。これは、日中韓がコアになりAAPPS加盟国15の国の研究者と将来的にDivision of Plasma Physics とDivision of Astrophysicsを形成するためのアジア学術拠点プログラム申請を中国側責任者ユアンラン女史に説明するためであり、また、彼女の理解を求めるためであった。この際も中国側と話しているのは財政的には日中韓と台湾がコアとなり、AAPPS加盟の開発途上国の研究者を育成してアジア太平洋全体の学術レベルを引き上げようということである。途上国に対等の資金拠出をせまれば、うまく行くものもギクシャクしてくるのは明らかである。

阪大フォーラムが盛大に行われ、ベトナム側から心から感謝される仕組みを皆で話し合っていきたい。

付録 1 : 関連HP

1.1 ベトナム大使館 (日本語のページ)

http://www.vietnamembassy.jp/index_j.html

1.2 在ベトナムの日本大使館の日本語ホームページ (情報満載)

http://www.vn.emb-japan.go.jp/index_jp.html

1.3 小泉総理が昨年10月にハノイを訪問した際の記事

首相官邸からの「ハノイ宣言」原文（仮訳）

<http://www.kantei.go.jp/jp/koizumispeech/2004/10/10keizai.html>

日本語の関連記事

<http://www.jijigaho.or.jp/cabi/041101/news04.html>

<http://www.fpcj.jp/j/fshiryuu/jb/0444.html>

The Japan Times (English)

<http://202.221.217.59/print/news/nn10-2004/nn20041011f2.htm>

1.4 視察団の写真公開ページ

常深先生撮影

<http://www.xray.ess.sci.osaka-u.ac.jp/~tsunemi/Vietnam2005Feb/>

能町先生撮影

<http://www.rcnp.osaka-u.ac.jp/~nomachi/vietnam/index.html>



国際会議場で行われた第1回首脳会合（10月8日）。

04年10月8、9日と小泉総理は第5回のアジア欧州会議 (ASEM) に出席してシラク仏大統領などと首脳会談を行った。しかし、温中国諸相との日中首脳会談は靖国神社問題など有り実現しなかった（上記、HPより）。9月の阪大フォーラムは同じ会場を使う。

付録2：第9回 APPC 準備状況のベトナムからの報告と議論

以下は、04年5月31日に、韓国・慶州で開催された第12回 AAPPs 理事会の際、ハノイでの APPC 開催に関係した内容の報告である。6月の日本物理学会理事会で報告した内容の一部である。今回のフォーラム運営に関係ありと思い転載した。

主催者のベトナム、Nguyen Van Hieuさんより報告あり。現在（当初の締め切りは本日）、ベ

トナムの参加登録者は100名程度、国外からの参加登録者は20名程度。国外の登録者があまりにも少ない(締め切り延期でだいぶ増えた。詳しくは<http://www.ims.ac.vn/appc03/>)。開催日の10月末あたりは観光客が多く、早めに人数が確定しないと会場やホテルの予約が困難になる恐れ。人数が少ない場合、会場を代える。

登録費は\$300で、ツアー料金も含む。加盟学会からのサポートがほしい。現在、\$5,000 (APCTP), \$4,000 (ICTP)の支援をいただいている。ただし、ICTPは開発途上国からの参加者の旅費援助。委員の人たちから、IUPAP, UNESCOなどに申請するには時期が遅すぎる(なぜ、もっと早めに動かなかったのか)などの意見。結論出す。

会議の論文集はベトナムで印刷する。出来上がりの質は保証する。



昨年10月ハノイでの第13回 AAPPs 理事会に集合した加盟学会の関係者。前列中央が APPC 議長のヒューさん。その向かって左が AAPPs 会長の Namkung (Korea), 小沼 (Special Advisor), Tsung (Taiwan)。右が Wu 女史 (China), 土岐 (理事)、多田 (応物)、Cheng-Ray (台湾物理学会会長)。(04年10月24日)

の31日には新理事の紹介と、次回の APPC 会議の開催国を発表する。したがってそれまでに、次回の第10回 APPC について決める必要があることが指摘された。(参考までに、第10回の APPC は韓国の強い提案で、韓国ポーハン工科大学が慶州で主催する。開催は2007年の夏の予定)。

Nguyen Van Hieu さんの報告に対し、現在のベトナムの LOC (Local Organizing Committee) の対応に苦言が出た。私も何度となくメールを送ったが返事が返らない。従って、現状がどうなっているのかわからない。どうも、LOC の人たちは Hieu さんの指示がないといっさい

APPC の10月25日開会が確認されたので、24日に AAPPs 理事会、OGM(総会)を行い、夜、新旧合同の AAPPs 理事会を開催することとした。したがって、関係者の到着日は会議開催

2日前の10/23。26日の夜に新理事の会を開催し、会長、副会長選出をおこなう。APPC 最終日

動けないようである。これは昨年から問題にされていた。そこで、本人がいるので、私も苦言を呈した。「貴方は帰国したら皆に、自分に相談せず、LOCのメンバーの判断で、どんだん返事をよこすように皆に命じてくれ。貴方がいない時はいっさい返事が無く困る。昨年、阪大で会ったLOCの若手研究者に先日、直接電話して『昨年、貴方と話した時、こちらの問い合わせには迅速に対応すると約束したではないか』と詰め寄った。彼からは、今後迅速に対応すると返事があった。Hieuさんが帰国したらこの点についても了解した旨、LOCのメンバーに伝えてほしい」と発言させて頂いた。Namkungも「貴方は長期にフランスに行ったりして、その間、誰も返事ができない状態だった。貴方がいなくても動けるように指示を与えるべきだ」と。Nguyen Van Hieuさんは科学大臣をしていた60代の方で、偉すぎて、ベトナム戦争後の30代が中心のLOCのメンバーは彼の許可なしにはいっさい動こうとしないようだ。

付記1：10/24日のAAPPS理事会でのヒュー議長の報告（Report on 9th APPC）は以下の通り。今回の9th APPCの議長から、明日からの会議に関係した報告があった。登録者数は総数が455、内、国外からの参加者が132人である。6月の申請締め切りの際、総数100、国外20から比べすごい数である（最終参加者数は367、外国から150、日本から72名）。

付記2：結局、日本の締め切りも私の独断で7月末に延期し、学会のメールなどで参加を広く呼びかけた。結果、日本からは72名の参加があった。最終参加者数は全部で367名、閉会式ではヒューさんが大変喜んでいました。